

成人看護実習の手術見学における看護学生の学び

石橋 鮎美・三島三代子・別所 史恵
狩野 芳子*・若槻 千春*

概 要

本研究の目的は手術見学実習の学びを明らかにすることである。成人看護実習で手術見学を行った学生37名のレポートの記述をBerelsonの内容分析の方法論を参考にして分析した。その結果、学びを表す368記録単位が抽出され【手術室看護師の卓越したスキル】【心理的援助】【手術室看護師の役割】【チーム医療】【医療安全】【麻酔】【周手術患者の理解の深化】【医療技術】【無菌管理】【看護観の深まり】【術中看護技術】【見学による体感】の12カテゴリーに分類された。学生の学びは手術室看護師に関することが多く、患者理解につながる学びは少なかった。しかし、学生は他では得難い学びを得ており手術見学の意義が確認できた。

キーワード：成人看護実習, 手術見学, 看護学生, 学び, 内容分析

I. はじめに

A大学短期大学部看護学科における成人看護実習（急性期）の実習目的は、成人の特性を踏まえ周手術期を含む急性期から回復期にある患者・家族への看護の実際を学ぶことである。本科目では周手術期にある患者を受け持つ場合、可能な限り学生の手術見学を行うようにしている。原則として受け持ち患者の手術を見学することにしているが、全ての学生が受け持ち患者の手術見学を行えているわけではない。患者の承諾が得られれば手術見学できるように調整しているが、実習の限られた期間中にいつもタイミング良く手術があるわけではなく、すでに手術を終えて回復過程にある患者を受け持つ学生もいる。また、受け持ち患者に手術見学の同意が得られないケースも多くなってきている。このような場合は、学生が受け持ち患者の身に起こったことと関連づけられるように、出来るだけ受け持ち患者と近い術式の患者の承諾を得て手術見学を行っている。これまでに手術室実習

に関する先行研究はいくつか報告され、手術室実習における看護学生の学習内容について明らかとなっている。原嶋らは、受け持ち患者の手術見学において「手術室内での患者の状況理解」や「チームワーク」について多くの学生が学習しているが「患者に必要な術後看護の理解」についての学びは少ないことを指摘している（原嶋, 2003）。また、奥村らは、実習条件の違いによって手術室実習での学生間の学びと内容の深さには差があるのではないかと述べている（奥村, 2003）。そこで、A大学短期大学部看護学科の行っている手術見学実習において、学生が実際に何を学んでいるのかを明らかにする必要があると考えた。

本研究の目的は、A大学短期大学部看護学科の成人看護実習（急性期）で行っている手術見学実習における学生の学習内容を明らかにすることである。

II. 研究方法

1. 用語の定義

学び：本研究における「学び」とは、知識の習得のみでなく実体験としての経験から生まれた気づきや感動などの主観的要素も含む。

* 島根県立中央病院
本研究は、島根県立大学平成21年度特別研究費の助成を受けて実施した。

2. 対象およびデータ収集方法

平成21年度、A大学短期大学部看護学科で成人看護実習（急性期）を行った学生（80名）のうち手術見学を行った44名中、研究に協力の得られた37名を対象とした。見学後3日以内に提出を求められている「手術見学の目標と評価・感想・参考文献」をA4版用紙1枚程度にまとめた課題レポートの記述内容をデータとして収集した。

3. 分析方法

言語的に記述された内容（表出されたコミュニケーション内容）を客観的、体系的、数量的に記述するための調査技法内容としてBerelsonの内容分析の方法論(Berelson, 1957)を用いた。方法論展開の詳細については舟島の著書(舟島, 2007)に従い、記述内容の出現を算出するための最小形である「記録単位」を手術見学で学習した内容1つを含む一文とした。そして、記録単位を性格づける際に吟味される最大形を取った内容である「文脈単位」を1人のレポート全体とした。これは、記録単位である学びの内容は学生の記述全体をよく吟味しない限り正確に理解できないためである。

学生の記載内容を可能な限り忠実に抽出した記録単位を意味内容の類似性に基づき分類し、サブカテゴリー化した。さらにそれを内容の性質でカテゴリー化して命名し、カテゴリーに分類された記録単位を算出した。分析の信頼性と妥当性を確保するために何度も記述内容を読み返し分類がふさわしいものであるのか確認を行いながら研究者で分析した。そして全員の合意が得られるまで検討を重ねた。

4. 倫理的配慮

本研究は、島根県立大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。学生には調査協力は自由意思であること、成績には一切影響しないこと、プライバシーを遵守すること等について文書と口頭で説明し同意書の署名を得た。同意書は2枚作成して研究協力者(学生)用と研究者用で保管できるようにし、研究者用の同意書は回収箱を設置して回収した。

Ⅲ. 手術見学実習の実際

3週間の成人看護実習（急性期）初日に学生は手術着に着替えて手術室の中に入り、臨床指導者から手術室の構造について30分程度のオリエンテーションを受ける。手術当日は入室前の手術を受ける患者のもとに挨拶に行き、術前の患者の状態を確認するように指導している。挨拶を済ませると、学生は手術着に着替え、手術室側から患者の入室を迎える。手術中は外回り看護師の指導のもと見学を行う。手術後は患者の退室を見届けてから、着替えを済ませて病棟に戻り帰室した患者の状態を観察する。手術見学にあたり学生には（1）周手術期における看護の目的や内容の理解を深める（2）手術後の看護実践に必要な手術室における患者の身体的・心理的反応や手術・麻酔等に関する情報を収集する（3）手術室における看護の目的・内容（実際）・看護師の役割についての理解を深めるという3つの目的を実習要項によって示し、学生自身も自分の目標を設定して手術見学に臨むように指導している。

Ⅳ. 結 果

対象者は44人であり、37人（84%）から研究協力への同意を得た。学生が見学した手術は全て全身麻酔によるものである。消化器外科30例（胃全摘術・腹腔鏡下胆のう摘出術など）・心臓血管外科5例（冠動脈バイパス術・僧帽弁置換術など）・胸部外科2例（胸腔鏡下肺葉切除術・乳房切除術）であった（表1）。

分析対象となった37名の記述（37文脈単位）から手術見学による学びを表す368記録単位が抽出された。手術見学による学びを表す記録単位は43サブカテゴリーに分類され、さらにそれは12カテゴリーに分類された。記述数が多かった順に表2に示す。以下カテゴリーを【 】で、またサブカテゴリーを〈 〉で示し、学生の具体的記述の一部を「 」で表す。

実際に手術見学をすることで学生は【手術室看護師の卓越したスキル】【心理的援助】【手術室看護師の役割】【チーム医療】【医療安全】【麻

表1 学生が見学した手術

	術式	人数
消化器 外科	胃切除術	9
	腹腔鏡下胃切除術	1
	胃全摘術	5
	腹腔鏡下胆のう摘出術	4
	開腹胆のう摘出術	1
	直腸低位前方切除術・ストマ造設	1
	イレウス解除術	1
	腹腔鏡下結腸切除術	2
	肝切除	1
	幽門輪温存臍頭十二指腸切除術	1
	腹腔鏡補助下直腸前方切除・ストマ造設	4
	合計	30
心臓 血管 外科	腹部大動脈瘤人工血管置換術	1
	弁置換術・メイズ	1
	弁置換・冠動脈バイパス術	1
	冠動脈バイパス術	1
	FFバイパス術	1
	合計	5
胸部 外科	乳房切除術	1
	胸腔鏡下肺葉切除術	1
	合計	2

酔】【周手術患者の理解の深化】【医療技術】【無菌管理】【看護観の深まり】【術中看護技術】【見学による体感】について学んでいた。

1. 【手術室看護師の卓越したスキル】

このカテゴリーは74記録単位（20.1%）、9サブカテゴリーで形成されていた。器械出し看護師が「手術の流れを把握」して「素早く的確な器械出し」をするのを目の当たりにした学生は〈能率的な器械出しの技術〉に驚嘆していた。また、患者が入室する前から「手術が安全に進むようにそれぞれが役割を持って事前準備」をしている姿を見て手術室看護師には〈万全な準備をする力〉が必要であると感じていた。術中は「他職種と連携」し「周りを見ながら手術をサポート」する〈外回り看護師の調整力〉が必須であり、「縁の下の力持ち」のような「なくてはならない存在」であると感じていた。そして、手術室看護師が様々なことを「テキパキとこなしている」ことに驚き〈効率的な行動力〉や〈先を予測した行動〉が必要であると捉えていた。さらに「多くの似たような器械や器具の

違いを把握」している様子から、麻酔や手術方式も熟知した〈より専門的な知識〉が求められており「ただ出血量を測定するだけでなくアセスメントが大事」であると〈多角的なアセスメント力〉の重要性も感じていた。また、学生の見学している手術が予定の術式から変更になった際には、手術室看護師が「臨機応変に対応」できる〈柔軟な判断力〉を兼ね備えていることを認識し「長時間の緊張した手術に耐えうる体力と精神力を維持」するための〈体調の自己管理〉が不可欠であると捉えていた。以上のような、単に看護技術というものを超えた熟練した達人としての技、すなわち経験と努力によって培われていく【手術室看護師の卓越したスキル】を学んでいた。

2. 【心理的援助】

このカテゴリーは51記録単位（13.9%）、5サブカテゴリーで形成されていた。学生は「麻酔がかかるまで1つ1つの作業を説明」するなどの〈手術室での丁寧な説明と声かけ〉や「マスクを外した入室時の出迎え」による〈入室時

表2 手術見学による学生の学びのカテゴリー

n=368

カテゴリー	記録単位数 (%)	サブカテゴリー (記録単位数)
手術室看護師の卓越したスキル	74 (20.1%)	能率的な器械出しの技術 (21) 万全な準備をする力 (13) 外回り看護師の調整力 (12) 効率的な行動力 (6) 先を予測した行動 (6) より専門的な知識 (6) 多角的なアセスメント力 (4) 柔軟な判断力 (4) 体調の自己管理 (2)
心理的援助	51 (13.9%)	手術室での丁寧な説明と声かけ (22) 入室時の不安緩和への支援 (14) 術前からの不安緩和への支援 (8) 術後のねぎらい (4) 患者の立場に立った配慮 (3)
手術室看護師の役割	48 (13.0%)	外回り看護師の役割 (37) 器械出し看護師の役割 (4) 手術室看護師の役割 (4) 外回り・器械出し看護師の役割の違い (3)
チーム医療	43 (11.7%)	手術室での協働 (20) 病棟と手術室の連携による継続看護 (11) 各自の責任ある役割の遂行 (9) チーム一体となり手術の成功を目指す姿勢 (3)
医療安全	39 (10.6%)	術中合併症の予防 (14) ガーゼの残留確認 (12) 患者の誤認予防 (10) 転倒転落予防 (2) スタンダードプリコーションの遵守 (1)
医療技術	26 (7.1%)	手術手技 (17) 高度な医療技術 (9)
麻酔	21 (5.7%)	麻酔導入時覚醒時の看護 (12) 麻酔の進行と患者の反応 (9)
周手術期患者の理解の深化	17 (4.6%)	術後看護との関連性 (11) 患者の身体症状との関連性 (3) 患者心理の理解の深まり (3)
無菌管理	16 (4.3%)	清潔野の保持 (10) 無菌操作 (6)
看護観の深まり	16 (4.3%)	生命の尊厳 (10) 生命を守る責任 (4) 看護の視野の広がり (2)
術中看護技術	10 (2.7%)	術中のバイタルサインの観察 (8) ガーゼカウント (2)
見学による体感	7 (1.9%)	手術室の雰囲気 (4) 病巣の確認 (3)

の不安緩和への支援〉が行われていることを学んでいた。そして、見慣れない環境に置かれて緊張している患者にとって「術前訪問に行った顔見知りの看護師が傍にいる」ことが精神的安寧につながると気づき〈術前からの不安緩和への支援〉が必要であることや〈術後のねぎらい〉

によって安心感を与えていること学んでいた。また、心理的援助をするにあたり〈患者の立場に立った配慮〉が重要であると感じとっていた。このように、学生は手術を受ける患者に対する【心理的援助】について学んでいた。

3. 【手術室看護師の役割】

このカテゴリーは48記録単位（13.0%）からなり、4サブカテゴリーで形成されていた。「ガーゼカウント・物品の補充・記録などの手術がスムーズに進むための幅広い看護」が〈外回り看護師の役割〉であり「術者が安心して手術を実施できるよう直接支援している」のが〈器械出し看護師の役割〉であるという各看護師の具体的な業務内容からその役割について学んでいた。また、手術見学をするまで曖昧であった〈外回り・器械出し看護師の役割の違い〉についても理解していた。そして〈手術看護師の役割〉は「病棟に比べると患者に接する時間は短い、患者さんが安全に確実に安心して手術が受けられるように援助」し「手術というストレスや不安を軽減させ手術侵襲にも対応」することであると感じていた。学生は病棟とは異なった専門的で特有な【手術室看護師の役割】について学んでいた。

4. 【チーム医療】

このカテゴリーは43記録単位（11.7%）からなり、4サブカテゴリーで形成されていた。学生は手術中に「医師、看護師が1つのチームとなり声かけ」しながら、情報交換の様子を見て「手術は絶対に一人ではできない」と感じ「協力していかなければ、絶対に成功しない」と〈手術室での協働〉について学んでいた。また、手術室で病棟看護師が申し送りを受ける姿から「手術が終了しても、これで終わりではなく病棟看護師にとっても患者さんにとってもスタートであるのだな」と感じており、手術を受ける患者に対する看護が手術室の中だけで展開されるのではなく〈病棟と手術室の連携による継続看護〉として行われていることを理解していた。このように手術室看護には各職種や他部門との連携が極めて重要であり、まずチームの一員として〈各自の責任ある役割の遂行〉がされ、その上で〈チーム一体となって手術の成功を目指す姿勢〉が必要であると捉え【チーム医療】について学んでいた。

5. 【医療安全】

このカテゴリーは39記録単位（10.6%）から

なり、5サブカテゴリーで形成されていた。手術室看護師が「褥瘡予防」のために除圧マットを敷き「神経麻痺を予防する体位固定」をする様子などから、起こりうるリスクを想定し可能な限りの〈術中合併症の予防〉がされていることを学んでいた。また〈患者の誤認予防〉の徹底のためにタイムアウトし「声に出して全員で患者・術式の念入りの確認」をしている所や「何度もガーゼカウント」を行って〈ガーゼの残留確認〉をしているのを見て、安全面にも十分な配慮をされていることを知り「閉腹前のガーゼ残留確認で、実際に腹部からガーゼが出て来るのを目の当たりにした」ことでその重要性を理解していた。そして退室時には〈転倒転落予防〉にも努めなければならないことや〈スタンダードプリコーションの遵守〉が感染症対策の基本であることも学んでいた。人的に麻酔や手術という生体侵襲を与える治療において、患者の生命の安全と安楽が守られているという【医療安全】についての学びを得ていた。

6. 【医療技術】

このカテゴリーは26記録単位（7.1%）からなり、2サブカテゴリーで形成されていた。手術の実際を見学することで、学生は「ビルロートⅡ法による再建方法」などの術式を目視で確認し「胃の切除は自動吻合器で一瞬だが、大網の処理・周囲の動静脈の処理は緻密な作業で時間がかかる」など〈手術手技〉についての理解を深めていた。そして「内視鏡手術は出血が少なく」患者の「負担が少ない」ことや「使用する器具・器械の種類、量、機能の多様性」から、医学の進歩を実感し〈高度な医療技術〉を駆使した手術が行われていることに感動し【医療技術】についての学びを得ていた。

7. 【麻酔】

このカテゴリーは21記録単位（5.7%）からなり、2サブカテゴリーで形成されていた。学生は外回り看護師が「硬膜外麻酔時の体位保持」や「麻酔覚醒時の意識状態の観察」をしているのを見て〈麻酔導入時・覚醒時の看護〉の実際について学ぶと共に「麻酔導入後は本当に眠るように意識がなくなっていく」ことに驚き、実

際に「バイタルサインの変化」を観察する事で〈麻酔の進行と患者の反応〉についての理解を深め【麻酔】について学んでいた。

8. 【周手術期患者の理解の深化】

このカテゴリーは17記録単位（4.6%）からなり、3サブカテゴリーで形成されていた。学生は手術見学をしたことで、術中の患者の状態と〈術後看護との関連〉について納得し、例えば「胃のほぼ2/3くらい切除しないとがんは取り除けないものなのだ」と実感し「残胃の小ささと機能低下によるその後の苦痛を理解」したり「術後に必要とされるケアの大切さ」を認識したりしていた。また「臓器の実物を見ることでイレウスの原因を理解」し〈患者の身体症状との関連性〉についても学んでいた。さらに、実際に自分の目で「術後の患者の笑顔や涙を見て手術に対する計り知れない心理がある」ことを感じとっており〈患者心理の深まり〉もあった。こうして、術前・術中・術後の一連のプロセスを統合した【周手術期患者の理解の深化】がみられた。

9. 【無菌管理】

このカテゴリーは16記録単位（4.3%）からなり、2サブカテゴリーで形成されていた。手術室内では常に「汚染区域と清潔区域を常に意識した」行動で〈無菌状態の保持〉がされており、「滅菌手袋をはめて滅菌のガウンを装着」して徹底した〈無菌操作〉を行い、厳重な【無菌管理】をしていることを学んでいた。

10. 【看護観の深まり】

このカテゴリーは16記録単位（4.3%）からなり、3サブカテゴリーで形成されていた。手術を受けている患者を見ることで「生命の尊さを感じるとともに、医療技術の発展により、助かる命・つながる命があるという事実」や「人間の生命力の強さ」に感動し〈生命の尊厳〉を実感していた。そして「視覚だけでなく嗅覚という感覚を用いて手術を見学し、手術を受けているのは生身の患者さんであると実感して身がしまる思いがした」という記述もあり「人の命を守ること、その大切さ」を改めて認識し〈生

命を守る責任〉を自覚していた。また「手術室と病棟では働いている環境や内容は違っているが、看護師は常に患者のことを思い最善を尽くしている」ことに気づき、手術室での看護実践を知ることで「看護という概念の大きさ」を感じて〈看護の視野の広がり〉がみられる学生もいた。以上のように学生は、手術見学によって【看護観の深まり】があった。

11. 【術中看護技術】

このカテゴリーは10記録単位（2.7%）からなり、2サブカテゴリーで形成されていた。学生は手術室看護師の業務の中でも、特に〈術中のバイタルサインの観察〉や〈ガーゼカウント〉についての看護技術に注目しその手技について学んでいた。手術室看護師の看護実践を見学することで「Aラインや体温センサー付き膀胱留置カテーテルを使用した持続的なモニタリング方法」が具体的にわかり、さらに学生がガーゼカウントを体験することで「ガーゼカウントの手順」の実際を理解していた。学生は手術室における看護技術の手技【術中看護技術】について学んでいた。

12. 【見学による体感】

このカテゴリーは7記録単位（1.9%）からなり、2サブカテゴリーで形成されていた。学生は「緊迫した手術室をイメージしていた」が、見学で「患者は歩行入室」し「穏やかな雰囲気」で進行していく手術を経験し、実際の〈手術室の雰囲気〉を体感していた。そして、摘出された胆のうが「手のひらに収まる大きさ」で「胆石を触ってみると、本当に硬くて石そのもの」であることや、切除した動脈瘤を見て「よく今まで耐えてこられたな」と感じ〈病巣の確認〉をしていた。このように、学生は手術や病巣について五感を使って理解していた。

V. 考 察

学生は手術見学で医療者に注目し、その専門性や役割、チーム医療などに関して多くを学んでいた。このことから、実習要項に示している手術室における看護の目的・内容（実際）・看

看護師の役割についての理解を深めることは出来ていると考えられる。学生の学びの記述からは手術室看護という専門性の高い看護を目の当たりにして、卓越したスキルを持ち第一線で活躍する看護師や、個人の責任が基盤にある絶妙なチームワークに圧倒され感嘆している様子が伺える。学生は、手術室において看護師の一つひとつの行動を見学することで、看護師をモデルとする学びを深めると言われており（大谷，2006）、そのことが今回、看護師に関する学びが非常に多かった要因と考えられる。看護師に関する学びの中で、学生は外回り看護師の役割について多くの記述をしているが、これは外回り看護師の指導のもとで手術見学を実施するため、より目が向きやすいためであると考えられる。原嶋らは「学生の指導を間接看護師に委任していることで、手術室看護師の援助技術や能力、態度を体験でき、そこに働く人の協力関係を学び、学習に良い影響をもたらしている」（原嶋，2003）と述べているが、A大学短期大学部看護学科の行っている手術見学実習でも同様の傾向が見られており、学生は手術室看護師に関する学びを深めていた。

一方で、手術室内での患者の様子に焦点を当て、周手術期患者やその家族の理解を学びとして記述した学生は少なかった。手術を受ける患者を中心にして周手術期を捉え、術前・術中・術後というプロセスの中で患者は身体的にも精神的にも急激に変化していく。こうしたプロセスに応じた周手術期における看護の目的や内容の理解を深め、その患者の身体的・心理的反応を把握し術後の看護実践に活かせるような手術見学にしていかなければならない。周手術期患者やその家族の理解は、つまり周手術期看護の対象者の理解である。看護は知識や技術のみで行えるものではなく、対象を理解して初めてそのニーズが把握でき、より良いケアの提供につながっていくと考える。しかし、危機的状況にある患者と体験を共にしていることに関心を向けている学生は少なかった。酒井は「人は経験によって学ぶと言われるが、人が経験によって学ぶのは、唯、単に何かを経験するからではなく、能動的意識が体験に意味を与えていく」と述べている（酒井，2000）。現在の実習

目標の提示や動機付けだけでは、周手術期に身を置いている患者や家族の理解につながるような能動的意識への働きかけが不足していると考えられる。医療者目線だけで手術を捉えるのではなく、手術という一場面の見学を通して患者の立場から術前から術後までの一連の経過を統合することができるように、学生の設定する手術見学の目標を患者理解の方にも向けるような関わりが必要であると考えられる。

また、少数ではあるが生命を賭けて手術に臨んでいる患者と相對して、人の生命の重みとそれを守る責任を真摯に感じ取っている学生もいた。このような学びは、生命に直結した医療が展開されている手術のありのままを見学したからこそ、現実味を伴った素直な感動や実感として印象に残るものであると推察される。遠藤らの臨床で働く看護師を対象にした、学生時代の手術室実習で学んだことの調査によると「手術の現実味（手術現場に居合わせることで感じられる五感に響く臨場感）」を学んだとの回答が最も多く、かつ、この学びは看護師になってからも臨床で役に立つと捉えていることが明らかになっている（遠藤，2008）。このような心を動かされる経験は、事前の働きかけによる能動的意識とは別に、手術見学でその場にいることで初めて感じ取ることができる学びであると思われる。このような見たまま・感じたままの事柄を感得として、より多くの学生の学びとする必要がある。そのためには手術見学した学生の学びを共有するカンファレンスなど、学生同士で感得を表現する場を設け学生一人ひとりの看護観を養えるような機会をつくることも必要である。強烈な印象を残す手術室での深い感情体験は、人の生命の重みとそれを守る責任を考えるきっかけとなっており、これは患者が生命の危機的状況におかれている手術室であるからこそ学び得たことであると考えられる。

学生の記述内容から明らかとなった12カテゴリーの学びの多くは、ただ知識を教授されたからといって理解を深めることができる内容ではなく、自分が実際に手術見学をしなければ学びを深化させる事が難しいと思われる内容であった。学生は実際の手術を見学することで他では得難い学びを得ており、手術見学の意義が確認

された。

VI. 結 論

1. 学生の手術見学による学びとして368記録単位が抽出された。それは43サブカテゴリーに分類され、さらに【手術室看護師の卓越したスキル】【心理的援助】【手術室看護師の役割】【チーム医療】【医療安全】【麻酔】【周手術患者の理解の深化】【医療技術】【無菌管理】【看護観の深まり】【術中看護技術】【見学による体感】という12カテゴリーの学びに分類された。
2. 学生の学びの内容は、手術室看護師の卓越したスキルのカテゴリーや手術室看護師の役割のカテゴリーなど医療者に注目した学びの記述が多く、周手術期患者の理解の深化などの患者の体験に注目した学びの記述は少なかった。
3. 今後、患者体験にも注目し周手術期に身を置いている患者の理解につながる見学となるよう、見学前の学生に対しての動機付けの必要性が示唆された。
4. 学生の感動や実感が感得となるようにカンファレンスなどを利用し、学生同士で感じたことを共有できるような場を設け、看護観を養っていく機会をつくる必要がある。

VII. おわりに

本研究は、学生が提出したレポートの記述内容から手術見学の学びを分析しており、学生の経験が記述として表現されていないものに関しては学びとしての分析はできておらず学生の学び全てについて明らかに出来ているとは言い切れない。また、A大学短期大学部看護学科の行っている手術室実習での学びの分析であり、一般化は難しい。しかし、A大学短期大学部看護学科の手術実習は意義があることが本研究で明らかとなった。今後の課題としては、手術見学を全ての学生が行っているわけではないので、手術見学で得られた学びの共有化をはかることである。さらに、手術見学を学生の能動的な体験としてより一層意義あるものにするために、学

生は何を学ぼうとし、実際に何を学んだのかという学生の目標設定と学びの関係性についての検討が必要である。

謝 辞

手術という危機的状況に立たされる中、学生の手術見学を承諾して下さった患者の皆様、学生の指導を快く引き受けて下さった病院スタッフ同様、そして研究に協力して下さった学生の方々に心から感謝申し上げます。

文 献

- 奥村美奈子, 兼松恵子, 北村直子, 田中克子, 小田和美, 梅津美香, 古川直美, 原敦子, 林幸子, 小野幸子, 坂田直美, 齊藤和子 (2003): 手術室実習を通しての学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 3 (1): 89-94.
- 遠藤由希, 五木田和枝, 幸田登美子, 藤波富美子 (2008): 学生時代の手術室実習の学びに関する看護師への調査, 日本看護学会論文集看護教育39号, 349-351.
- 原嶋朝子, 加藤千恵子, 鈴木夕岐子, 浅見多紀子, 柴崎いづみ, 久保かほる, 鈴木妙 (2003): 周手術期看護実習の手術見学における看護学生の学習内容, 成人看護 I : 12-14.
- 舟島なをみ: 質的研究への挑戦 (第2版), 40-79, 医学書院, 東京.
- Berelson, B (1957): Content Analysis, in Lindzey, G., Aronson, E, Addison-Wesley publishing Company, Inc / 稲葉三千男, 金圭煥 (1957): 内容分析, 1-79, みすず書房, 東京.
- 酒井明子 (2000): 周手術期看護における見学と実習のコンテキストの理論的検討-活動システムモデルを用いて-福井医科大学研究雑誌, 1 (1): 219-232.

成人看護実習の手術見学における看護学生の学び

Student Nurse's Learning in Operation Visit of Adult Nursing Practice

Ayumi ISHIBASHI, Miyoko MISHIMA, Fumie BESSHO,
Yoshiko KARINO and Chiharu WAKATUKI*

Key Words and Phrases : Adult nursing Practice, Operation visit, Student nurse,
Learning, Contest analysis

*Shimane Prefectural Central Hospital